

■ 昨日も今日もいつまでも変わらない聖霊の働き

使徒の働き2：12に「いったいこれはどうしたことか。」と書かれています。これはペンテコステの日の出来事が表現されています。まさしく「なんじゃこりゃ！！」と思う状況になったのです。みなさんは、本当に飢え渴いて聖霊さまを待ち望んだことがありますか？たとえば、韓国のクリスチャンはいかがでしょう？いつも涙を流して胸をたたいて「アボジー」と飢え渴いています。戦後のクリスチャン人口も今や30～40%になっています。さらに中国は1日に3万人がクリスチャンになる勢いです。本当に、飢え渴いて求める…まるでハンナの祈りのように、心を注ぎ出して祈る時に神の栄光が現されるのです。それは今も変わらないのです。なぜならば、イエスキリストは昨日も今日もいつまでも同じであるからです！1～3節に「五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた。すると突然、天から、激しい風が吹いてくるような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。また、炎のような分かれた舌が現われて、ひとりひとりの上にとどまった。」と書かれています。これは、聖霊が下ったことが記されている素晴らしい記事です。そして彼らに起こった不思議なことに「他国のことばで話された」とあります。これは「みな聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおり」だったのです。その結果、周囲の人々は「驚きあきれてしまった(6節)」「驚き怪しんで(7節)」「驚き惑って(12節)」となったのです。つまり、主の訪れが使徒に現れた時、聖霊が下った時に起きた周囲の反応は同じように、この国においても起こるのです。

■ ①臨在と油注ぎ

神さまがおられるところを「臨在」と言います。イエスさまが物理的に復活した体で現れたのはエルサレム周辺に限られます。しかし、主は摂理的に、「人々は物理的に解放されなければいけないこと」を知っておられました。これが成されるためには、どうしても第3の方…聖霊が下らなければならないのです。聖霊が下るならば、時代・民族を越え、どこにでもいらっしゃることの出来る遍在（どこにでも存在できることの出来る）の主が、この地上で働くことが出来るのです。ですから、この教会も、今エルサレムに行つてあの2階座敷でお祈りするよりも、もっと主の臨在と油注ぎがあると信じます。旧約聖書の時代から主の臨在と油注ぎについて書かれています。最初はエデンの園におられました。しかしアダムとエバが罪を犯しました。そしてエデンの園を追われてからは、幕屋の至聖所の契約の箱に臨在されました。それからどんどん変わります。契約の箱が運ばれ、雲の柱・火の柱が臨在をあらわすこともありました。ダビデも主の臨在を望み神殿を建てたいと願いましたが、主は彼の息子ソロモンの時代にそれを望まれました。「今、わたしは、とこしえまでもそこにわたしの名を置くためにこの宮を選んで聖別した。わたしの目とわたしの心は、いつもそこにある(II歴代7:16)」と言ってソロモンは主に神殿をささげました。すなわち主はここを選んで神殿に臨在をあらわしたと言うことなのです。ですがこれがずっと続くわけではありません。多くの民の祈りにこたえてイエスさまメシアとしてがお生まれになります。そのメシアとしてこられた時に主ご自身のいる場所は神ご自身の臨在の場所そのものになったのです。だからイエスさまが行くところどころに大群衆が押し寄せ、多くの奇蹟が起こったのです。そしてイエスさまが十字架にかかり、神さまのご計画が成就した時、神殿

の幕は真っ二つに引き裂かれ神殿の時代が終わり、初代教会が誕生したのです。すなわち、イエスさまが「いと高きところから力が下るまで」と言われて、彼らは飢え渴いて待ち望んで、そして五旬節の日に聖霊が下った時に聖霊は遍在の主としてどこにでもいることの出来る生きて働く聖霊神ご自身として全世界・全時代を引き受けてくださったのです。

■ ②内住の神

そして今、聖霊さまは私たちのただ中に住まわれています。「その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです(ヨハネ14:17)」私たちは、聖霊の宮・神の神殿となったのです。ここ(私たちの内側)を主の住まいとするならば主はいつも働いて、私たちに豊かな恵みを溢れさせてくださいます。でも大事なことは、私たちは主の宮・神殿の管理人であることです。管理人としてサタンに隙を与えてはいけません。聖霊さまがいつもいるにふさわしく、神さまが嫌いサタンが好む罪を清め、良い宮・神殿を管理しなければならぬのです。良い管理者であれば、私たちを通して主の栄光が現されると信じます！

■ ③驚嘆する伝道

そういう聖霊に満たされた方は、使徒の働き2章に書かれているように神さまの栄光をあらわすことが出来るのです。驚嘆する伝道につながるのです。「人々はみな、驚き惑って、互いに「いったいこれはどうしたことか。」と言った。(使徒2:12)」とあります。このように、私たちを通して人々が本当に驚くような神の栄光ある業が成されていくのです！イエスさまを、みんな信じざるを得ないのです。圧倒的な主の臨在と御ちからがあらわされると「信じる」「信じない」の問題ではなく、否定できない・否めない…「これは現実だ」と目の当たりにして、その日の内に男だけで三千人が救われているではありませんか。私たちもこの領域に入りたいのです。しかし、神の栄光ある業は、周囲の人々の常識を越えているので「驚きあきれてしまった(6節)」「驚き怪しんで(7節)」「驚き惑って(12節)」う人がたくさんいますが、その人たちの一番の現実「霊の眼」がまだ開かれていないと言うことです。このような方々には超自然的なことは起こりませんが、主はこのような方々に超自然的なものを見せて、なにか奇蹟を通して成果を上げたり結果を出すことを目的とされていません。主がしたいことは、これらを通して本当に頼るべきものは何か、また、主の思いを私たちの思いとすることが出来るように導き私たちに聖別してくださるのです。ここで誤解が生じると、教会の働きと仕事が混在してしまい、心の内側が満たされず疲れ果ててしまいます。でも、本当に主の心で主に満たされて主のために私たちの働きを一挙手一投足お捧げします！と言う思いですと、万一失敗したとしても、見える形で結果が現れなくても私たちの内側は充足感で満ちあふれます。内住の聖霊さまが喜ばれるからです。ですから、今一度、自分の心がどこにあるのか、聖霊さまが私たちのどこで働かれているのかを…自分の心を探ってください。神ペンテコステのこの日、もう一度聖霊さまと親しい交わり、親密な関係を得られるように聖霊さまを飢え渴いて熱心に求めていきましょう！

(要約者:行司 佳世)

(5月15日)